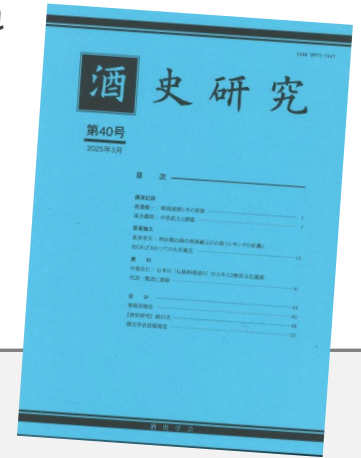


資料A：清酒出荷石数1位ブランド+TOP20ブランドの130年の変遷 + 知られざる、かつての大手銘柄情報

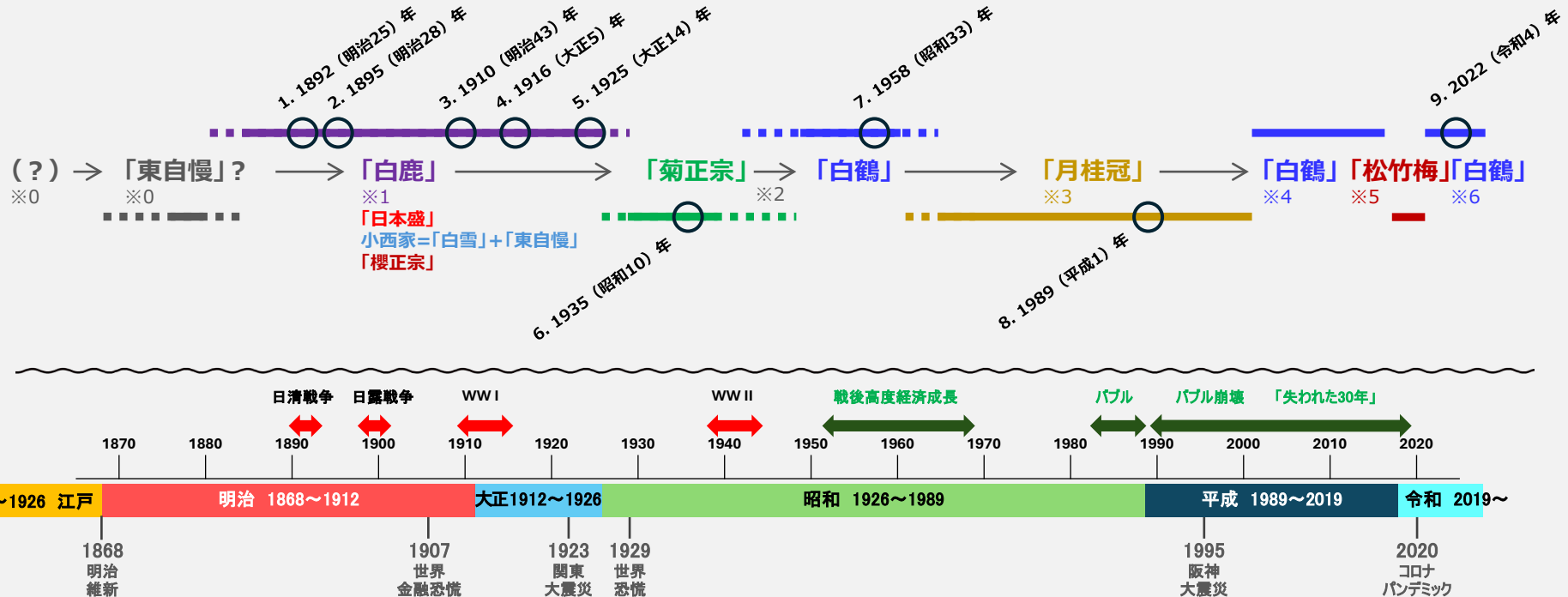
2025年の「酒史研究」（「酒史学会」の学会誌）に、私が投稿した『明治期以降の清酒蔵元の石数ランキングの変遷と知られざるかつての大手蔵元』という論文が掲載されました。明治以降の大手蔵元の石数の変遷を調査し、一覧表として記載しています。（辰馬家（明治期には石数1位の「白鹿」をはじめ5社以上の辰馬姓の大手蔵元があった）、若井家（「牡丹正宗」、本邦2位だったが今は知る人が少ない）についても調査しています。）

このページのチャートは、論文で調査した ○印をつけた明治・大正・昭和・平成・令和の9つのポイントの年の石数実績（次ページ以降に上位20位のみ抜粋）などをもとに、筆者が推定した「清酒出荷石数1位ブランド」の変遷です。（1960年代以前は正しくない部分があるかもしれません。お気づきの点があればご指摘ください。）

この「資料A」には「明治～現在の130年」の「9つのポイント年」について、TOP20ブランド（論文から抜粋）を掲載します。別資料で「戦後の昭和～現在の55年の変遷」を「5年ごとの12のポイント年」で観察した「資料B」があります。）



清酒出荷石数1位ブランドの130年の変遷



前ページの「清酒出荷石数1位ブランドの130年の変遷」のチャートの注釈

※0 「白鹿」（辰馬たき、辰馬本家）の前（130年よりさらに前）の1位が、「東自慢」（辰馬半右衛門・鳴尾辰馬家）というのは筆者の推測です。その前は、やはり灘の蔵元だと考えますが、特定できていません。（最終ページの「私的な小考」参照）

※1 この期間、ほとんどの年が「白鹿」が1位だが、1910（明治43）年は「日本盛」が1位、1925（大正14）年は「小西家」（＝「白雪」＋「東自慢」）が実質の1位。（以下のページの当該年のスライド参照） また1923（大正12）年は「櫻正宗」が1位。（「酒類流通システムのダイナミズム」二宮麻里氏による） この期間は、ほかにも1位となった銘柄があったかもしれない。

※2 1925年は「白鹿」が1位であるが、2位の「菊正宗」とは僅差であった。1935年は「菊正宗」が1位、1958年は「白鶴」が1位であるのは確認できるが、戦前、戦後については情報は少なく、このころは、あるいは他の銘柄が1位だった年があるかもしれない。ただし、第二次大戦の中頃から戦後数年間は日本全体の清酒出荷石数が極端に減り、合成清酒も多くつくられ、清酒1位を論じる状況ではなかったと思われる。

※3 1960年代ころから2001年まで半世紀ほど、「月桂冠」が1位

※4 2002年から2017年まで16年間、「白鶴」が1位

※5 2018年から2021年まで4年間、「松竹梅」が1位（松竹梅が白鶴を抜いたのは一般新聞報道では2018年で、これは「国内出荷量」による。日刊経済通信社「酒類食品統計月報」の統計上は松竹梅が白鶴を抜いたのは2019年。これは「国内出荷量」＋「輸出量」としているため。白鶴は松竹梅に比べて輸出量が大きい。

※6 2022年から「白鶴」が1位、現在（本稿作成は2025年4月）に至る

清酒出荷石数TOP20ブランドの130年の変遷

表1. 1892（明治25）年

「酒史研究」の論文から、上位20社のみ引用

銘柄によるTOP20

	銘柄	酒造家	石数	注記
1	「白鹿」	辰馬たき（西宮ほか）	23,510	辰馬本家
2	「牡丹正宗」	（初代）若井源左衛門（西郷）	14,694	若井本家
3	「戎面」（えびすかほ）	日本攝酒株式会社（西宮）	13,783	社長は辰馬喜十郎、南辰馬家
4	「東自慢」	辰馬半右衛門（今津ほか）	12,658	鳴尾辰馬家
5	「日本魂」	江井ヶ嶋酒造（株）（兵庫・明石）	10,331	* 1
6	「志ら泉」	鷺尾久太郎（今津ほか）	10,108	
7	「澤之鶴」	石崎喜兵衛（西郷）	9,054	
8	「山星」	鈴木忠右衛門（滋賀と魚崎ほか）	推定 8,000～9,000	* 2
9	「澤亀」	宅徳平（大阪・堺と御影）	推定 8,000～9,000	* 3
10	「東褒紋正宗」	辰馬與平（西宮）	7,899	
11	「鯉正宗」	辰馬喜十郎（西宮）	6,599	南辰馬家 ※
12	「都賀意鶴」	野田三郎（西宮ほか）	5,986	
13	「企業」「源勲」	西宮企業株式会社（西宮）	5,790	
14	「大関」	長部文治郎（今津）	5,712	
15	「富久娘」	花木甚右衛門（西郷）	5,059	
16	「勤王」	辰馬半蔵（西宮ほか）	4,698	
17	「忠勇」	若林與左衛門（西郷）	4,633	
18	「泉正宗」	泉仙介（西郷）	4,580	
19	「白鷹」「褒紋正宗」	（初代）辰馬悦蔵（西宮）	4,177	北辰馬家
20	「世界長」	小網與八郎（御影）	3,786	

出典：『続灘酒』の明治25年情報を基本に、当時、灘五郷以外で3,000石以上であったと推定できる蔵元を追記

酒造家名欄の（ ）書き：「灘五郷」については地域名、「灘以外」は県名などを記載し表中に色付け

* 1 石数は江井ヶ嶋酒造の社史から。ト部兵吉（社長）の灘の2,171石を含む。

* 2 灘・魚崎は2,629石（『続灘酒』）だが、滋賀を合わせると8,000～9,000石だったと推定

* 3 灘・御影は2,136石（『続灘酒』）だが、堺を合わせると8,000～9,000石だったと推定

※ メモ：アトキンソン著「The Chemistry of Saké Brewing」（明治11年）で辰馬喜十郎の酒の分析が記載されているが、その銘柄は「弘明一」 Kome-ichi

実質TOP3（オーナー毎の合計による）

1	「白鹿」	辰馬たき	23,510	辰馬本家
2	「戎面」+「鯉正宗」	日本攝酒株式会社+辰馬喜十郎	20,382	辰馬喜十郎（南辰馬家）がオーナー
3	「牡丹正宗」	（初代）若井源左衛門	14,694	若井本家

清酒出荷石数TOP20ブランドの130年の変遷

表2. 1895（明治28）年

「酒史研究」の論文から、上位20社のみ引用

銘柄によるTOP20

	銘柄	酒造家	石数	注記
1	「白鹿」	辰馬たき	27,204	辰馬本家
2	「牡丹正宗」	（初代）若井源左衛門	18,977	若井本家
3	「東自慢」	辰馬半右衛門	15,941	鳴尾辰馬家
4	「澤之鶴」	石崎喜兵衛	13,642	* 1
5	「戎面」	日本攝酒株式会社	13,562	社長は辰馬喜十郎、南辰馬家
6	「日本魂」	江井ヶ嶋酒造（株）（兵庫・明石）	12,588	ト部兵吉（社長）の灘の2,323石を含む
7	「澤亀」	宅徳平（大阪・堺）	10,100	うち、灘では2,757石（「続灘酒」）
8	「山星」	鈴木忠右衛門（滋賀）	10,082	うち、灘では3,161石（「続灘酒」）
9	「志ら泉」	鷺尾久太郎	9,031	
10	「東褒紋正宗」	辰馬與平	7,382	
11	「鯉正宗」	辰馬喜十郎	6,989	南辰馬家
12	「都賀意鶴」	野田三郎	6,687	
13	「菊正宗」	嘉納治郎右衛門	6,499	
14	「富久娘」	花木甚右衛門	6,088	
15	「泉正宗」	泉仙介	5,550	
16	「民光」	森民蔵（宮城）	5,335	現、合資会社森民総本家
17	「企業」「源勲」	西宮企業株式会社	5,298	明治29年から西宮酒造株式会社に
18	「大関」	長部文治郎	5,092	
19	「寿海」	坂口吉蔵	4,932	
20	「？」	日本醸造会社	4,851	

出典：『明治廿八年度全国酒造家造石高見立鑑』を基本に、『続灘酒』の明治28年情報で各蔵の石数を検証しながら作成
酒造家名欄の（ ）書き：「灘五郷」は省略、「灘以外」は県名などを記載し表中に色付け

* 1 13,642石は『明治廿八年度石高見立鑑』による。『続灘酒』では3,642石だが13,642の誤植と考えられる。石崎喜兵衛と* 3以外のすべての灘五郷の蔵元の石数は「明治廿八年度石高見立鑑」と「続灘酒」ではほぼ完全に一致している。

実質TOP3（オーナー毎の合計による）

1	「白鹿」	辰馬たき	27,204	辰馬本家
2	「戎面」+「鯉正宗」	日本攝酒株式会社+辰馬喜十郎	20,551	辰馬喜十郎（南辰馬家）がオーナー
3	「牡丹正宗」	（初代）若井源左衛門	18,977	若井本家

清酒出荷石数TOP20ブランドの130年の変遷

表3. 1910（明治43）年

「酒史研究」の論文から、上位20社のみ引用

銘柄によるTOP20

	銘柄	酒造家	石数	注記
1	「日本盛」「惣花」	西宮酒造株式会社	24,764	
2	「白鹿」	13代辰馬吉左衛門	23,664	辰馬本家
3	「澤之鶴」	石崎合資会社	16,358	
4	「櫻正宗」	山邑太左衛門	16,279	
5	「東自慢」	辰馬半右衛門	16,091	鳴尾辰馬家
6	「菊正宗」	合名会社本嘉納商店	15,921	
7	「月桂冠」	大倉恒吉（京都・伏見と灘）	15,645	* 1
8	「日本魂」	江井ヶ嶋酒造（株）（兵庫・明石と灘）	15,279	* 2
9	「戎面」	日本撮酒株式会社	13,833	社長は辰馬利一、南辰馬家
10	「牡丹正宗」	（二代）若井源左衛門	13,738	若井本家
11	「忠勇」	若林合名会社	12,636	
12	「白鶴」	嘉納治兵衛	11,458	
13	「富久娘」	花木甚右衛門	9,664	
14	「鯉正宗」	辰馬利一	9,266	南辰馬家
15	「泉正宗」	泉仙介	9,235	
16	「國憲」	鷺尾萬介	8,474	
17	「大黒正宗」	安福又四郎	8,300	
18	「大関」	長部文治郎	7,946	
19	「志ら泉」	鷺尾久太郎	7,702	
20	「菅公」	菅野安治郎	7,332	

出典：『続灘酒』の明治43年情報を基本に、当時、灘五郷以外で3,000石以上であったと推定できる蔵元を追記

酒造家名欄の（ ）書き：「灘五郷」は省略、「灘以外」は県名などを記載し表中に色付け

* 1 灘は3,719石。総石数15,645石は、月桂冠の社史から。

* 2 灘は2,333石。総石数15,279石は、江井ヶ嶋酒造の社史から。

実質TOP3（オーナー毎の合計による）

1	「日本盛」「惣花」	西宮酒造株式会社	24,764	
2	「白鹿」	13代辰馬吉左衛門	23,664	辰馬本家
2	「戎面」+「鯉正宗」	日本撮酒株式会社+辰馬喜十郎	23,099	辰馬喜十郎（南辰馬家）がオーナー

清酒出荷石数TOP20ブランドの130年の変遷

表4. 1916（大正5）年

「酒史研究」の論文から、上位20社のみ引用

銘柄によるTOP20

	銘柄	酒造家	石数	注記
1	「白鹿」	13代辰馬吉左衛門	30,744	辰馬本家
2	「日本盛」「いろ盛」	西宮酒造株式会社	25,186	※ ※ メモ：アトキンソン著「The Chemistry of Saké Brewing」（明治11年）で「いろ盛」の分析が記載されるが、蔵元名はIdzumi Man-suke 泉万助？
3	「櫻正宗」	山邑太左衛門	24,954	
4	「菊正宗」	合名会社本嘉納商店	20,964	
5	「月桂冠」	大倉恒吉（京都・伏見と灘）	19,528	* 1
6	「澤之鶴」	石崎合資会社	15,605	
7	「忠勇」	若林合名会社	15,062	
8	「日本魂」	江井ヶ嶋酒造（株）（兵庫・明石と灘）	推定 15,000以上	* 2
9	「白雪」	小西新右衛門（兵庫・伊丹と灘）	推定 15,000程度	* 3
10	「白鶴」	嘉納合名会社	14,325	
11	「東自慢」	本辰酒造株式会社	12,427	1915（大正4）年に小西新右衛門（「白雪」）が辰馬半右衛門の酒造を買収、本辰酒造を設立
12	「戎面」	日本攝酒株式会社	11,985	社長は辰馬利一、南辰馬家
13	「泉正宗」	泉仙介	11,731	
14	「大黒正宗」	安福又四郎	10,681	
15	「大関」	長部文治郎	9,863	
16	「國憲」	鷺尾萬介	9,634	
17	「牡丹正宗」	（二代）若井源左衛門	8,593	若井本家
18	「鯉正宗」	辰馬利一	8,217	南辰馬家
19	「国産一」	覚心平十郎	8,117	
20	「世界長」	小網與八郎	7,630	

出典：『続灘酒』の大正5年情報を基本に、当時、灘五郷以外で3,000石以上であったと推定できる蔵元を追記

酒造家名欄の（ ）書き：「灘五郷」は省略、「灘以外」は県名などを記載し表中に色付け

* 1 灘は5,490石。総石数19,528石は、月桂冠の社史から。

* 2 灘は2,229石。総石数は「大正8年で18,497石（江井ヶ嶋酒造酒造の社史）」から大正5年は15,000以上と推定。

* 3 は7,960石。伊丹は「大正8年7歳で9,118石（小西酒造の社史）」から7,000石程度と推定。

実質TOP3（オーナー毎の合計による）

1	「白鹿」	13代辰馬吉左衛門	30,744	辰馬本家
2	「白雪」+「東自慢」	小西新右衛門+本辰酒造株式会社	推定 27,400程度	小西新右衛門がオーナー
3	「日本盛」「いろ盛」	西宮酒造株式会社	25,186	

清酒出荷石数TOP20ブランドの130年の変遷

表5. 1925（大正14）年

「酒史研究」の論文から、上位20社のみ引用

銘柄によるTOP20

	銘柄	酒造家	石数	注記
1	「白鹿」	辰馬本家酒造株式会社	37,750	辰馬本家
2	「菊正宗」	株式会社本嘉納商店	37,231	
3	「月桂冠」	大倉恒吉（京都・伏見と灘）	33,123	左記石数のうち、灘は7,051石
4	「日本盛」「いろ盛」「菊花紋正宗」	西宮酒造株式会社	31,159	
5	「櫻正宗」	山邑酒造株式会社	31,026	
6	「白鶴」	嘉納合名会社	24,923	
7	「白雪」	小西新右衛門（兵庫・伊丹と灘）	21,929	左記石数のうち、灘は7,960石 * 1
8	「澤之鶴」	石崎株式会社	20,713	
9	「忠勇」	若林合名会社	19,754	
10	「富久娘」	花木三二郎	19,390	
11	「東自慢」	本辰酒造株式会社	18,063	小西新右衛門が所有
12	「大黒正宗」	安福又四郎	12,947	
13	「大関」	長部文治郎	11,929	
14	「戎面」「喜鳳紋正宗」	日本攝酒株式会社	10,887	社長は辰馬利一、南辰馬家
15	「泉正宗」	泉仙介	10,642	
16	「日本魂」	江井ヶ嶋酒造（株）（兵庫・明石）	推定 10,000程度	灘は0 * 2
17	「白鷹」	（三代）辰馬悦蔵	9,890	北辰馬家
18	「金杯菊正宗」	高田三郎	8,516	
19	「国産一」	覚心平十郎	8,076	
20	「金露」	大塚合名会社	7,568	

出典：『続灘酒』の大正14年情報と、『名古屋税務監督局管内清酒一千石以上醸造家番附』（大正12年）から作成
酒造家名欄の（ ）書き：「灘五郷」は省略、「灘以外」は県名などを記載し表中に色付け

* 1 小西酒造の社史では灘は7,960石。「続灘酒」では灘は8,451石。

* 2 灘の造石は大正13年まで。

実質TOP3（オーナー毎の合計による）

1	「白雪」+「東自慢」	小西新右衛門+本辰酒造株式会社	39,992	小西新右衛門がオーナー
2	「白鹿」	辰馬本家酒造株式会社	37,750	辰馬本家
3	「菊正宗」	株式会社本嘉納商店	37,231	

清酒出荷石数TOP20ブランドの130年の変遷

表6. 1935（昭和10）年

「酒史研究」の論文から、上位20社のみ引用

銘柄によるTOP20

	銘柄	酒造家	石数	注記
1	「菊正宗」	株式会社本嘉納商店	33,344	
2	「白鹿」	辰馬本家酒造株式会社	27,661	辰馬本家
3	「白鶴」	嘉納合名会社	25,947	
4	「日本盛」	西宮酒造株式会社	25,014	
5	「月桂冠」	株式会社大倉恒吉商店（伏見と灘）	22,021	伏見と灘の合算
6	「千歳鶴」	日本清酒株式会社（北海道）	19,892	北海道の各工場の合算
7	「北の誉」	野口合資、ほか（北海道）	17,596	北海道の各工場の合算、後の北の誉酒造株式会社
8	「富久娘」	花木本家商店	17,407	
9	「澤之鶴」	石崎株式会社	16,635	
10	「白雪」	小西酒造株式会社（兵庫・伊丹と灘）	15,984	伊丹の11蔵と灘の蔵の合計
11	「忠勇」	若林合名会社	15,387	
12	「千福」	合名会社三宅清兵衛商店（広島）	13,215	（メモ：「満州千福」でも7,200石程度を製造）
13	「大関」	株式会社長部文治郎商店	12,864	
14	「キンシ正宗」「金鶏正宗」	堀野久造（京都・伏見と灘）	12,641	伏見と灘の合算
15	「國冠」ほか	久星酒造・久星商店（埼玉と灘）	12,494	埼玉と灘の合算
16	「東自慢」	本辰酒造株式会社	11,941	小西家がオーナー
17	「桜正宗」	山邑酒造株式会社	10,985	
18	「金杯」	株式会社本高田商店	10,329	
19	「白鷹」	株式会社辰馬悦蔵商店	10,185	北辰馬家
20	「山星」ほか	山星鈴木商店など（埼玉、群馬、灘）	9,900	埼玉、群馬、灘の合算

出典：日本・海外とも『日本酒類醤油大鑑（昭和11年刊行）』から、ホノルル酒造製氷は筆者付記
酒造家名欄の（ ）書き：「灘五郷」は省略、「灘以外」は県名などを記載し表中に色付け

実質TOP3（オーナー毎の合計による）

1	「菊正宗」	株式会社本嘉納商店	33,344	
2	「月桂冠」+「月桂正宗」	株式会社大倉恒吉商店 + 共同酒造株式会社	31,251	大倉恒吉がオーナー
3	「白雪」+「東自慢」	小西新右衛門 + 本辰酒造株式会社	27,925	小西新右衛門がオーナー

「酒史研究」の論文から、この表に関する記述の引用：22位の「共同酒造株式会社」は、1921（大正10）年に月桂冠の大倉恒吉が経営権を取得、昭和初期から大規模に醸造していた。月桂冠に共同酒造を加えると31,251石で全国2位となる。（共同酒造は、昭和19年に（株）大倉恒吉商店から大倉酒造（株）に改組するとき、吸収合併。なお、現在ある共同酒造とは別会社）

清酒出荷石数TOP20ブランドの130年の変遷

表7. 1958（昭和33）年

「酒史研究」の論文から、上位20社のみ引用

自醸石数（自社の生成石数）TOP20

	銘柄	酒造家	石数	注記
1	「白鶴」	白鶴酒造	29,429	
2	「菊正宗」	本嘉納商店	27,031	
3	「白鹿」	辰馬本家酒造	26,000	1943（昭和18）年、戦争中の企業整備により、辰馬本家は、南辰馬家の酒造（日本摂酒株式会社の「戎面」※と、個人による「鯉正宗」）と合併
4	「月桂冠」	大倉酒造（京都・伏見と灘）	25,764	
5	「千歳鶴」	日本清酒（北海道）	20,120	
6	「白雪」	小西酒造（兵庫・伊丹と灘）	19,546	
7	「日本盛」	西宮酒造	17,147	
8	「大関」	長部文次郎商店	13,890	
9	「澤之鶴」	石崎酒造	12,431	
10	「櫻正宗」	山邑酒造	12,133	
11	「忠勇」	若林酒類食品	11,632	
12	「千福」	三宅本店（広島）	10,319	
13	「キンシ正宗」	堀野商店（伏見）	9,251	
14	「喜久水」	喜久水酒造（長野）	8,744	
15	「国冠」	久星酒造	8,601	
16	「世界長」	世界長酒造	8,482	
17	「多聞」	多聞酒造	8,299	
18	「富久娘」	花木酒造	8,055	
19	「沖正宗」	沖正宗酒造（山形）	7,508	
20	「賀茂鶴」	賀茂鶴酒造（広島）	7,494	

出典：『神戸銀行調査月報 昭和34年4月』掲載の「全国主要清酒メーカー製成石数順位」酒造家名欄の（ ）書き：「灘五郷」は省略、「灘以外」は県名などを記載し表中に色付け

「酒史研究」の論文から、この表に関する記述の引用：資料の注釈には、「勿論、桶買い石数が加算されていないため販売実勢とは一致しないとしても、大勢は動かない」とある。表7は1位「白鶴」、2位「菊正宗」、3位「白鹿」、4位「月桂冠」、5位「千歳鶴」などとなっているが、販売石数では順位は違ったものだったと思う。

メモ：2つの「戎面（えびすかほ）」？

日本撮酒※と坊垣酒造

1980-90年代、「戎面」といえば坊垣酒造だった。なぜ2つの「戎面」があったのか、経緯は不明。

坊垣酒造：1917（大正6）年創業、神戸・東灘の蔵元。1995年の阪神大震災で被災し、休止。

（筆者は、国道43線沿いの坊垣酒造の大きな看板が「鳳凰戎面」だったのを覚えている。あるいは、数ある「XX正宗」ブランドと同様、日本撮酒の「戎面」に「鳳凰」を付けて商標としていたのかもしれない。）



坊垣酒造株式会社の「戎面」のラベル（ネットから取得）よく見ると「鳳凰」の文字も書かれているが、ほぼ「戎面」である。

清酒出荷石数TOP20ブランドの130年の変遷

表8. 1989（平成1）年

「酒史研究」の論文から、上位20社のみ引用
右の表、「出荷石数TOP20」は追加

自醸石数（自社の生成石数）TOP20

出荷石数TOP20

	銘柄	酒造家	石数 (万石)	注記
1	「月桂冠」	月桂冠（京都・伏見と灘）	35.15	伏見＋灘
2	「大関」	大関	25.74	灘＋丹波工場
3	「黄桜」	黄桜酒造（京都・伏見と丹波）	23.68	伏見＋丹波工場 * 1
4	「日本盛」	西宮酒造	18.76	
5	「白鶴」	白鶴酒造	18.23	
6	「松竹梅」	宝酒造（京都・伏見と灘）	12.99	伏見＋灘
7	「白鹿」	辰馬本家酒造	12.00	
8	「白雪」	小西酒造（兵庫・伊丹と灘）	11.04	伊丹＋西宮
9	「菊正宗」	菊正宗酒造	10.44	
10	「世界鷹」ほか	小山本家、世界鷹G（埼玉ほか）	9.76	* 2
11	「沢の鶴」	沢の鶴	7.32	
12	「富久娘」	富久娘酒造	6.75	灘＋西宮
13	「高清水」	秋田酒類製造（秋田）	6.05	
14	「爛漫」	秋田銘醸（秋田）	5.48	
15	「百万石」「寿海」	百万石酒造	5.46	灘＋丹波（西村泰彦－沢の鶴）
16	「多聞」	多聞酒造	5.34	
17	「会津ほまれ」	ほまれ酒造（福島）	5.00	
18	「朝日山」	朝日酒造（新潟）	4.62	
19	「福德長」	福德長酒類	4.17	
20	「サクラ一文字」	桜酒造（兵庫・篠山）	4.04	

	銘柄	石数 (万石)
1	「月桂冠」	46.30
2	「白鶴」* a	35.57
3	「日本盛」	34.41
4	「大関」	34.27
5	「黄桜」	25.17
6	「松竹梅」	24.12
7	「白雪」	22.25
8	「菊正宗」	21.98
9	「白鹿」	14.94
10	「剣菱」	14.11
11	「沢の鶴」	13.63
12	「富久娘」	10.82
13	「世界鷹」ほか	9.06
14	「高清水」	7.77
15	「千福」	7.37
16	「爛漫」	7.20
17	「多聞」	6.64
18	「賀茂鶴」	6.41
19	「白牡丹」	5.24
20	「会津ほまれ」	5.08

出典：日本は『全国酒類製造名鑑 1991』から作成、海外は筆者が作成

酒造家名欄の（ ）書き：「灘五郷」は省略、「灘以外」は県名などを記載し表中に色付け

* 1 『全国酒類製造名鑑 1991』では「伏見30,505KL、丹波工場26,762KL」とあるが、蔵元から情報を得て修正

* 2 埼玉・小山本家酒造＋伏見・世界鷹＋秋田・北鹿＋新潟・雪椿

「酒史研究」の論文から、この表（左の表「自醸石数TOP20」）に関する記述の引用：出典は「20度換算の生成数量」なので、アルコール度数16度の量に換算したうえで、石数（万石）表示。出典には「この製成数量には契約醸造分や桶売買数量は加味されていない。したがって、課税移出数量とは大幅に異なるメーカーもある。」と。この頃、ほぼすべての大手蔵元は（また多くの地方中堅蔵元も）、販売に不足する分は「桶買い」をして補った。

→ 右の表、同じ年の「出荷石数TOP20」を追加掲載。

出典：日刊経済通信社 1991年、

『酒類食品産業の生産・販売シェア』

*a 1976（昭和51）年、「白鶴」は「忠勇」ブランドを併合している

清酒出荷石数TOP20ブランドの130年の変遷

表9. 2022（令和4）年

「酒史研究」の論文から、上位20社のみ引用

出荷石数（国内課税移出＋輸出）TOP20

	銘柄	酒造家	石数（万石）	注記
1	「白鶴」	白鶴酒造	24.49	
2	「松竹梅」	宝酒造（京都・伏見と灘）	24.02	
3	「月桂冠」	月桂冠（京都・伏見）	19.03	
4	「世界鷹」など	世界鷹小山本家G（埼玉ほか）	15.14	
5	「大関」	大関	8.42	
6	「黄桜」	黄桜	8.25	
7	「菊正宗」	菊正宗酒造	7.27	
8	「日本盛」	日本盛	6.58	
9	「大雪の蔵」「福德長」など	オエノンG（北海道ほか）	5.96	
10	「清州桜」	清洲桜醸造（愛知）	4.01	
11	「白鹿」	辰馬本家酒造	3.73	
12	「獺祭」	旭酒造（山口）	3.16	
13	「朝日山」	朝日酒造（新潟）	2.88	
14	「八海山」	八海醸造（新潟）	推定 2.8程度	筆者の推定＊1
15	「播州錦」	キング醸造（兵庫）	2.79	
16	「菊水」	菊水酒造（新潟）	2.39	
17	「沢の鶴」	沢の鶴	2.06	
18	「北関」	北関酒造（栃木）	推定 2.0程度	筆者の推定＊1
19	「高清水」	秋田酒類製造（秋田）	1.92	
20	「剣菱」	剣菱酒造	1.68	

出典：日本は『酒類食品統計月報』2023年3月号などから作成

酒造家名欄の（ ）書き：「灘五郷」は省略、「灘以外」は県名などを記載し表中に色付け

＊ 1 資材使用量や業界情報による推定

「酒史研究」の論文から、この表に関する記述の引用（一部修正）：2022（令和4）年の出荷量トップは「白鶴」である。石数トップは1990年代以降、「月桂冠」「白鶴」「松竹梅」が競ってきた。出荷量の全国トップ3の変遷の概略を書く：1970年代から2001年まで長年にわたって1位が「月桂冠」。2位・3位は、「白雪」「白鶴」「日本盛」「大関」「松竹梅」が、入れ替わりながら登場。2002（平成14）年トップ交代、1位が「白鶴」。2位・3位は当初「月桂冠」「大関」、その後は「月桂冠」「松竹梅」となり2017（平成29）年まで継続。2018（平成30）年から、「松竹梅」「月桂冠」の順に。2018年トップ交代、1位「松竹梅」、2位「白鶴」、3位「月桂冠」。2022（令和4）年トップ交代、1位「白鶴」、2位「松竹梅」、3位「月桂冠」。以降、この順番で今（2024年）に至る。

(参考写真) 知られざる、かつての大手銘柄

「牡丹正宗」(若井源左衛門)の菰樽



「東自慢」(本辰酒造)のラベル+ツル正宗酒造も



- 「牡丹正宗」は明治時代に本邦2位の大手銘柄だった(本資料の1892(明治25)年・1895(明治28)年のページ参照)が、二代の若井源左衛門の代後期に大きく石数を落とし、三代若井源左衛門の代で廃業。創業から70年ほどで消滅した。今は知る人は少ない。
- 上の画像の出典は「酒蔵の町・新川ものがたり」(高木藤夫ほか、1991年)。東京で「牡丹正宗」を一手販売していた、新川の大手下り酒屋の「中井酒店(なかいさかだな)」について書かれたもの。中井酒店は「大関」とも非常に縁が深かったようだ。
- 画像のように、銘柄デザインは、大書した「正宗」の後ろに白い「牡丹」の絵が描かれる。「菊正宗」は「正宗」の後ろに「菊」(小さな写真2枚。出典は株式会社本嘉納商店、1959年、『菊正宗 創業参百年』)、「櫻正宗」は「正宗」の後ろに「桜」など、多くの正宗がこのパターンを採用していた。
- 若井家の酒造と銘柄は消滅したが、家系として「黄桜」に受け継がれていること、若井家が「月桂冠」の灘進出で援助したことなど、近世清酒産業に大きな役割を果たした。

- 「東自慢」は元々、辰馬半右衛門(鳴尾辰馬家)の銘柄で、明治時代、本邦3位や4位の大手銘柄だった。(本資料の1892(明治25)年・1895(明治28)年のページ参照。最終ページに書くように、1位だった時期もあると筆者は推定する。)
- 辰馬半右衛門は、船舶投資や株式投資に失敗し、酒造業を手放すことになった。1915(大正4)年に小西新右衛門(「白雪」)が買収、「本辰酒造」として設立、「東自慢」の酒銘はそのま引き継いだ。(社名に本辰とあるが辰馬家とは無関係)
- 大正末期、「白雪」と「東自慢」を合計すると、小西家が本邦1位の石数だった。(1925(大正14)年のページ参照)本辰酒造は、1948(昭和23)年に小西酒造「白雪」が吸収合併、本辰酒造と東自慢はなくなった。今は知る人は少ない。
- ラベル2枚は、石田信夫氏所蔵。石田氏は本辰酒造の「東自慢」のラベル左一ほかに、ツル正宗酒造(西宮市浜脇町、主銘柄は「ツル正宗」、少なくとも1990年代まで(阪神大震災まで?)は存在。代表者は小嶋和三郎、小嶋和四郎)の「東自慢」のラベル右一も所蔵される。事情は不明だが、本辰の東自慢ブランドは一時期、ツル正宗酒造に引き継がれていたようだ。本辰は「ツル正宗」ブランドをついていたようなので、ツル正宗酒造自体が、本辰の一部を引き継いでできた会社だろうと推定。

(参考写真) 知られざる、かつての大手銘柄

小西酒造の「白雪」と「東自慢」の広告

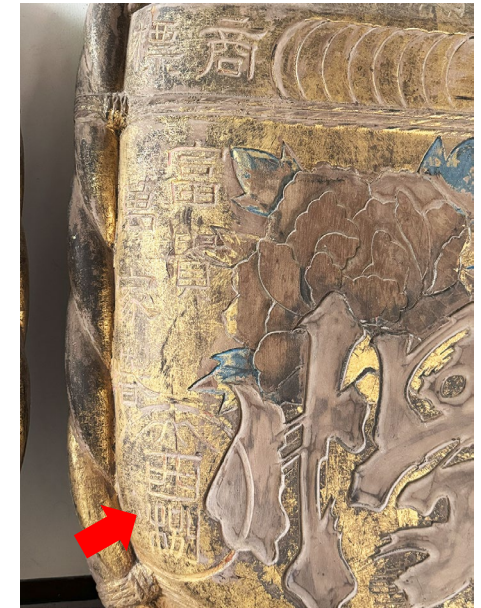


お揃いの「白雪」と「東自慢」の樽型看板



- 昭和24(1949)年の「全国酒類醸造家名鑑」掲載の大手ブランドの1ページ広告は全部で20銘柄、20ページ。そのうちの2つが、小西酒造の「白雪」と「東自慢」。白雪は摂津・伊丹、東自慢は灘・今津、とある。
- 小西酒造は前年の昭和23年に本辰酒造を吸収合併したが、この時点では「東自慢」銘柄を継続していた。
- 本辰酒造の場所は後に小西酒造西宮工場となった。小西酒造西宮工場はとても大規模な工場だったが、阪神大震災を経て、2003年に閉鎖された。

- 芦屋市某所に並んで保管される「白雪」と「東自慢」の樽型看板。同じサイズ、同じ様式でつくられている。
- 白雪の左下にはマルに「小西」、東自慢の左下にはマルに「小西棚(?)」「小西捌(?)」とある。富士のマークを小西の「小」と読ませるのだと思う。
- 2025年6月15日撮影、2neo



(追加資料) 石田信夫氏所蔵の古いラベル (本資料ランキング表に登場するブランド)



「志ら泉」：鷺尾久太郎、明治25年6位



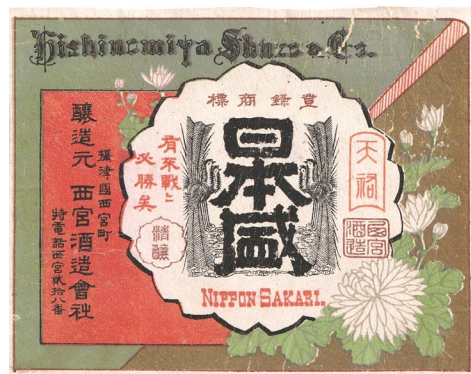
「勤王」：辰馬半蔵、明治25年16位



「澤亀」：宅徳平、明治28年7位



「山星」「君の寿」：鈴木忠右衛門、明治28年8位
(「山●」とあるのは「山星」の意味。かつては星は★でなく●だった。)



「日本盛」：明治43年1位



「澤之鶴」：明治43年3位



「大関」：明治43年15位

（私的な小考）もっと昔、明治初期以前の石数1位はどこだったか？

明治直前（慶応年間）～明治10年頃の石数1位？

手持ち資料で、明治元年以降で「地域ごとの石数統計」が初めて現れる数字、「伊丹2.8万石（@明治元年、47歳・40人）、灘五郷13.6万石（@明治2年、252歳・???人）、全国296.3万石（@明治5年、???歳・???人）」から想像して、このころの石数全国1位は、「蔵数5-7蔵（10蔵未満）、石数5-7千石（1万石以下）」の規模だったのではないかと考える。既述の通り、「明治25年の1位は辰馬本家の2万3,510石」だが、辰馬本家が刊行した文献*によれば「明治元年4,000石、明治10年7,000石、明治20年15,000石」とある。したがって明治10年前後に、それまでの1位から替わって白鹿が全国1位になったのではないか。（*辰馬本家酒造株式会社、1975年、『第十三代辰馬吉左衛門翁を顧みて』）

これらのことから、冒頭ページで、「白鹿」の前の1位は「**東自慢**」（鳴尾辰馬家）と推測を書いた。あるいは「**志ら泉**」（鷺尾久太郎）も大規模だったそうなので、1位の時期があったのでは、と考える。灘や西宮市などの文献で当時の有力蔵元の醸造石数記録を詳細に当たれば、実際の石数1位が特定できるのではないと思う。（石数変遷について、ご存じの方は、ぜひご教示ください。）

江戸後期の石数1位？

「江戸時代後期には、伊丹にとって代わって、江戸で灘酒が主流になった」とはよく言われるところで、文化・文政（1804～）や嘉永・安政（1848～）頃の石数1位は、灘の蔵元のどこかだと考えられる。「勝手づくり令」を経て、このころの石数1位は「10蔵程度・1万石越え程度」の規模だったと考える。

本嘉納（「菊正宗」）**や嘉納合名（「白鶴」）***は（明治初期には石数を落としていたが）、ともに江戸時代最盛期に1万石越えだったそう。菊正宗の社史**によれば、1826・1829年（文政年間）、1846・1852年（弘化・嘉永年間）などで1万石を超えている。（江戸期の「酒造株」や明治の「酒造鑑札」の石数は実際の自社醸造石数とは異なるので、醸造石数の調査は難しいので）本嘉納・嘉納合名以外に醸造石数1万石越えの蔵元があったかどうかの調べていないが、1万石越えの蔵が多数あったとは考えにくい。したがって、江戸時代後期は**本嘉納（「菊正宗」）**や**嘉納合名（「白鶴」）**が1位の時期があったのではないかと考える。（**株式会社本嘉納商店、1959年、『菊正宗 創業参百年』、***二宮麻里、2016年、『酒類流通システムのダイナミズム』、有斐閣）

江戸中期の石数1位？

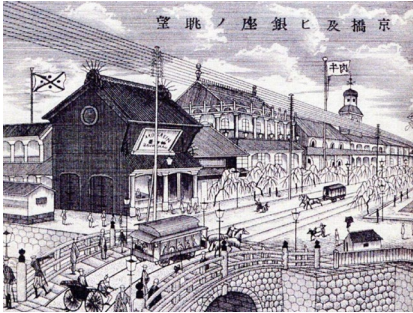
「剣菱」は江戸で人気のブランドで、「黄表紙」（大衆読み物）に、擬人化されたキャラクター「剣菱五位の尉」として、名手（名酒）として登場するほどだった。（畑有紀氏のいくつかの論文による）

ただし、商標登録のなかった江戸時代には、剣菱マーク  の酒は、「坂上（津国屋）の剣菱」（稲野利三郎、池上茂兵衛、白樫政雄を経て今につながる剣菱）以外にも多数あったことについては、<https://www.kitasangyo.com/pdf/archive/sake-info/tidbit.pdf> の7ページ参照。

上記リンク先には、江戸時代の「蔵元番付表」（たぶん1750年頃のもの）があるが、伊丹の坂上の「剣菱」と、伊丹の山本の「老松」が東西の大関となっている。また、老松酒造のホームページにも異なる「蔵元番付表」 https://www.oimatsu.biz/02_yurai.htm が掲載されているが、これも（東西が逆転しているが）坂上の「剣菱」と、山本の「老松」が大関。（江戸時代は「大関」が最高位）これらの番付表には灘の銘柄も記載されるが「前頭」以下で、「大関・関脇・小結」（上位）は伊丹・池田銘柄が独占している。江戸時代中期の全国1位は伊丹・池田の蔵元であった、また「**剣菱**」は江戸中期のどこかの時点で全国で石数1位だったと考える。また、剣菱より前の石数1位は、伊丹の「**老松**」、あるいは池田の「**満願寺**」 （引用した2つの番付表で関脇と小結）だったのではないかと。（「満願寺」が江戸中期に大規模だったのはいくつかの文献で指摘されている。）

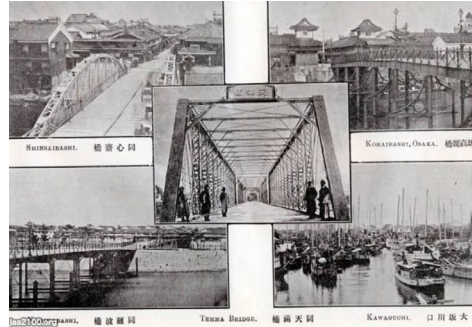
(付録) 130年の時代変化 (ネットから取得)

1. 1892 (明治25) 年



ジャパンアーカイブズ 東京 銀座通り (明治25年)
▷馬車鉄道が走る京橋・銀座通り

2. 1895 (明治28) 年



ジャパンアーカイブズ 大阪府 (明治28年)▷心
斎橋・天満橋 (中) ・高麗橋・川口

3. 1910 (明治43) 年



産経新聞 大阪 開業当時の真面有馬電気軌道の梅田駅
= 明治43年 (阪急阪神HD提供)

4. 1916 (大正5) 年



ジャパンアーカイブズ 東京 【1916年】浅草仲見世
(大正5年)▷大戦の好景気の仲見世

5. 1925 (大正14) 年



ジャパンアーカイブズ 京都 (大正14年)▷京都・新京極

6. 1935 (昭和10) 年



今昔物語 東京 1935(昭和10)年の三越本店と日本橋の様子

7. 1958 (昭和33) 年



この町アーカイブズ 横浜 1950年代後半頃の「横浜・元町商店街」

8. 1989 (平成1) 年



朝日新聞デジタル 東京 1989年7月 渋谷周辺 変わる銀座線

9. 2022 (令和4) 年



Sidentity-ストラクチャー的風景 東京 2022年1月1日の東京駅八重洲口と日本橋口の最高層ビル